

## 家庭児童相談室の窓から

いま、子どものいじめが社会問題になっています。ご相談のなかにいじめの話がでてくることは珍しくありませんので、相談室としていじめが減ったと感じたことはありませんでしたが、この10年余り、いじめは社会問題としてはほとんど注目されず、あたかも沈静化したかのように言われてきました。そのため、いじめ問題に対する意識啓発が疎かにされがちで、そうしたおとなの勉強不足がいじめへの適切な対応を遅らせるひとつの要因になってしまったのではないかと思います。

いじめが社会問題化するのはいじめによる子どもの自殺が大きく報道されたときだと言われています。日本では、中野富士見中学いじめ自殺事件（86年）、大河内清輝君事件（94年）の後にいじめに注目が集まりましたが、残念ながら今回も子どもたちの相次ぐ自殺がきっかけとなりました。

暴力が繰り返され、被害者が恐怖心や不安でいっぱいになると、加害者からの心理的支配を受けやすくなります。「自殺するくらいなら、学校を休めばよかったのに」「グループから抜ければよかった」とよく言われますが、「もう逃げられない」「死ぬしかない」という気持ちに追いつめられていくのです。

このような加害者の支配から逃れるようにするときには重要なのは、高いセルフ・エスティームと信頼できる人の存在です。自分を大切な存在だと考え、いじめから逃れるためにできることがあると信じる気持ち、そしてそれを一緒に考えてくれる人との絆が解決の原動力となります。子どもを支えるおとなたちを後ろから支援することも当相談室の役目のひとつです。

2007年が子どもたちの人権が守られる年になりますように。

（家庭児童相談室 相談員 砂川真澄）

